

小栗遺跡 C 地点

— 上平田小栗線道路改良事業に伴う発掘調査報告 —

1992. 3

諫 早 市 教 育 委 員 会

序

長崎県南部の中央部に位置し、県下最大の穀倉地帯を誇る諫早市は、悠久の昔から営々として青い泥土に挑み地味豊かな農地を創りだしてきました。

全国的にも特異な存在である「有明粘土」、即ち「がた」の自然陸化作用に着目し、その耕地化に取り組んだのは、いつの頃からなのかなど、興味ある問題です。

今回調査を実施しました小栗遺跡の成立も、また対岸に存在する諫早農業高校遺跡の成立も、これら生産背景の存在なしには語ることはできません。

発掘調査の進展により、諫早の歴史の解明がなされ、さらに歴史叙述としての学習資料とすべき責務が私たちにあります。

本書が、学習資料として、また学術研究に少しでも寄与できますれば、幸甚に存ずる次第です。

なお、調査の実施にあたり、ご協力・ご理解いただきました関係各位に対し心よりお礼申し上げます。

平成4年3月31日

諫早市教育長 山口利男

例 言

1. 本書は、都市計画道路3.4.212上平田小栗線道路改良事業に伴う小栗遺跡C地点の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、諫早市土木部道路課の依頼を受け、諫早市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査により出土した遺物は、諫早市教育委員会が保管し、諫早市郷土館において保存・公開している。
4. 本書に使用した高度値は海拔高であり、また方位は磁北を示している。
5. 本書の挿図、図版等は秀島、古賀が作成し、執筆・編集は秀島が行った。

本文目次

I 遺跡の地理的及び歴史的環境	1
II 調査の概要	4
III 遺跡の概要	5
1. 遺構	5
2. 遺物	6
IV まとめ	10

挿 図 目 次

第1図 諫早市位置図
第2図 遺跡分布図(1/50,000)
第3図 地形図及び調査区設定図(1/1,500)
第4図 土層図(1/60)
第5図 土壌1実測図(1/30)
第6図 土壌2実測図(1/30)
第7図 土壌3と溝状遺構実測図(1/30)
第8図 遺構配置図と遺物分布図(1/60)
第9図 炭化物を含む土壌と集石土壌(1/30)
第10図 遺物実測図(1/2)

表 目 次

第1表 遺跡地名表

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景
" (調査風景)
図版2 遺物出土状況
炭化物を含む土壌と集石土壌

I 遺跡の地理的及び歴史的環境

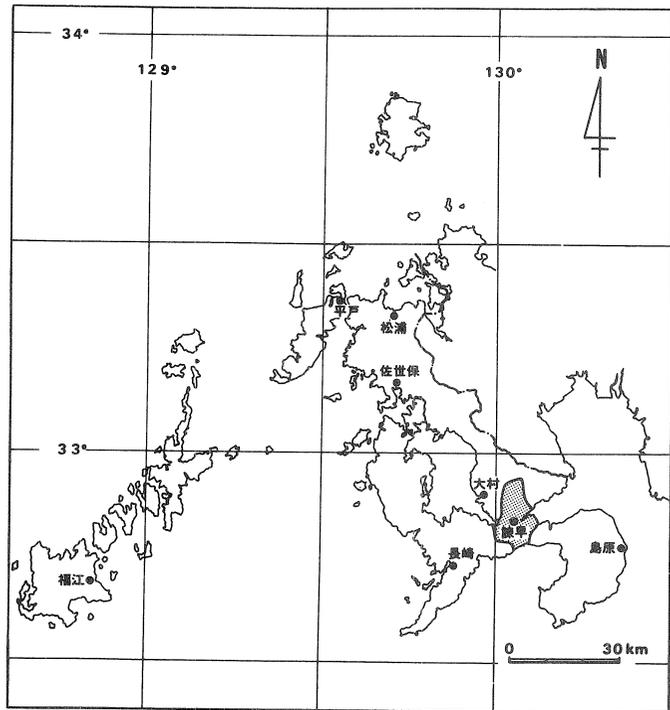
諫早市は、長崎県南域のほぼ中央に位置し、肥前半島から長崎・西肥半島と島原半島とが分岐する地峡部にあっており、主要交通機関が離合・集散する要衝でもある。

遺跡は、諫早市小川町に所在し、北緯 $32^{\circ} 49' 50''$ 、東経 $130^{\circ} 3' 50''$ に位置する。

周辺の地形は、北方に秀峰多良岳火山（有明海と大村湾との間に噴出した火山で、南北34km東西24kmの楕円形をなす。）があり、これを境に佐賀県と接している。標高1,075の経ヶ岳を主峰に、多良岳、五家原岳、帆柱岳、峰火山の群小火山が寄生し、その地形は複雑である。また浸食の度合いも高く、深い谷を解析して丁度掌を広げたような様相を示している。即ち豊肥系溶岩の残丘である経ヶ岳に、その後の山陰系火山活動による溶岩が噴出して五家原岳等の溶岩円頂丘を形成したとされる。^{註1}この深く切れ込んだ谷奥に源を発する河川のうち最も大きいものが本明川である。

本明川は、全長22kmと短く、流底の傾斜が急峻であるため扇状地を形成することなく有明海

へと流入している。また、有明海は、わが国で最大の大潮差を示し、有明海奥の住之江では494cmを計る。この結果大潮時には巨大な干陸部が出現し、その面積238.1km²に及んでいる。さらに、本明川の河口部から沖合数キロまでは層厚最大30mの泥質土である。この泥質土は、地元では「がた」、土木工学上は「有明粘土」と呼称されている。有明海研究グループによれば、形成された下限の絶対年代は、約9,000年B.P.前後とされている。^{註2}このことから類推すると、有明海に堆積する「がた」はヴェルム氷期の盛期を過ぎて海水が遡及するのに伴って形成されたものと考えられる。



第1図 位置図

諫早湾の泥質堆積物である「有明粘土」は、鎌田泰彦氏により分類された堆積型に依拠するとⅢ b型で湾奥部に堆積・分布することが指摘されている。これは、主として筑後川などから供給された微細な粒子が西流する湾内環流によって西側に運ばれ沈積したものである。

この沈積した「有明粘土」に対して、何時頃から人の手が加わり可耕地となったのか等解明すべき事項は多い。この耕作基盤の確立が本遺跡をはじめ類似遺跡の成立と深く係わっている



第2図 遺跡分布図 (国土地理院発行1/25,000を使用)

〔番号〕	〔遺跡名〕	〔所在地〕	〔立地〕	〔遺構・出土遺物等〕	〔時期〕
1	小栗遺跡C地点	諫早市小川町	標高20m 丘陵先端部	弥生土器他	弥生
2	林ノ辻遺跡	"	" 40m 丘陵全域	弥生土器, 土師器, 土師質土器 箱式石棺, 中世墓, 祭祀遺構	弥生~中世
3	"	"	" 50 丘陵全域	弥生土器	弥生
4	十仙原遺跡	" 鷺崎町	" 40 丘陵頂部	剥片他	弥生
5	源内谷遺跡	" 小川町	" 30 丘陵鞍部	剥片	縄文
6	諫早農高遺跡	" 船越町	" 10	細型銅剣, 弥生土器	弥生
7	高城城跡	" 高城町	" 50 独立丘陵	本丸, 空堀, 土塁, 瓦他	中世
8	田井原条里遺跡	" 幸町	" 5 水田		古代~中世
9	沖城跡	"	" 5	瓦, 瓦質土管, 陶器	中世~近世
10	崎田遺跡	" 長野町	" 25 丘陵先端部	弥生土器, 剥片他	弥生
11	大久保遺跡	"	" 30 丘陵斜面	剥片, 碎片	縄文
12	水葉山遺跡	"	" 20		縄文
13	長野城跡	"	" 100 山頂		中世
14	小野条里遺跡	" 小野町	" 4 水田	杭列, 水路, 土師器他	古墳~中世
15	宗方筒井遺跡	" 宗方町	" 3 水田	杭列, 貝塚, 弥生土器, 縄文土器, 骨角器, 獣骨, 石包丁	縄文~弥生
16	宮崎館遺跡	"	" 20 丘陵先端部	ナイフ形石器, 石鏃, 弥生土器, 土師器	旧石器~中世
17	小野城跡	" 小野町	" 40 丘陵頂部	本丸, 空堀, 六地藏石幢	中世~近世
18	小野貝塚	"	" 40 丘陵斜面	弥生土器, ウミナ, ハイガイ	弥生
19	内野遺跡	"	" 60 丘陵先端部	弥生土器, 石鏃他	弥生

第1表 遺跡地名表 (番号は第2図に一致)

宗方筒井遺跡の調査^{註4}によると、弥生中期初頭と考えられる土器群が検出され、また石包丁が採集されたことなどにより、この頃には既に干陸化した地域では稲作農耕がおこなわれていたと推定される。さらに同遺跡からは標高3.3m付近より杭列も検出され、諫早湾周辺の同位レベルの田圃は弥生期にその起源を遡及できるものもいくつかあると思われる。このことは、和島誠一氏らによって調査された有明海周辺の遺跡を基とした海水位の推定^{註5}と齟齬するものではない。

一方、本明川以南の地形は、砂岩等を基盤岩類とする第三紀層からなっており、趣を異にしている。栗面、小川、長野、小野など北面する丘陵先端部は凝灰角礫岩の被覆が認められ、以南には安山岩の被覆があり千々石湾へ没している。これらは、金比羅岳、蓮華石岳、獅子喰岳などによる生成と考えられる。

本遺跡もこれら表層岩類の上に立地しており、地元で呼称されるドンク盤、即ち火砕泥流を基盤としている。

さて、本遺跡の成立に可耕地の存在を推定したが、その蓋然性を証左するのが諫早農高遺跡の存在と、船越駅の駅田の想定である。

諫早農高遺跡については、正林護氏の報告^{註6}には、「1906年（明治39年）長崎県立農学校の校舎建設中、弥生前期後半の甕棺が発見され、細型銅剣一本が出土……『素焼き甕三二個発見した』……この銅剣は一部を欠いているが細型I bと考えられる資料」と報告されている。また、『林田重正さんの史跡たずねある記 その(二)』に記載があるので、その一文を引くと「大屋敷の一部若くは隣接地に、クワンスイ藪あり、……農学校創立の折、クワンスイ藪を開墾した。その折、平らにおいた巨大なる石板一枚発見。その下から頭蓋骨二ヶ、一尺七、八寸の三又槍先。二尺二、三寸の直刀二本、短刀二、三本が出てきた槍の類は青サビで一杯だった。頭蓋骨は青年のそれらしく思われた。……三又槍先というのは、A十かB十かと、たずねますとB型であった。（中略）もう一つ、私の最後の手段として、旭町の山口経男氏が銅剣類の所蔵をして居られるのを知っていましたので……」と記されているこれらのことは、本遺跡の成立背景に、広大な後背地があったことを想起させる。また、古くに可耕地が成立したことが、のちの船越駅の「駅田。……少路二町。」を作りだす基となったのであろう。

このように、本遺跡周辺には、歴史的・地理的に考究すべき重要な地点が数多くあり、これらを闡明化することにより当該地域の歴史的価値が更に高まるものと思われる。

註1 鎌田泰彦「変化に富む地形と地質」『長崎県の歴史と風土』1981

2 有明海研究グループ「有明・不知火海の第四系」『地団研専報』第11号 1965

3 鎌田泰彦「有明海海底堆積物」『長崎大学教育学部自然科学研究報告』第18号 1967

4 秀島貞康他「宗方筒井遺跡」『諫早市文化財調査概報』1992

5 和島誠一他「北九州における後氷期の海進海退について」『資源科学研究所彙報』63 1967 『日本考古学の発達と科学的精神』1973

6 正林護「諫早市出土の銅剣」『九州考古学』41-44 1971

7 諫早史談会「林田重正さんの史跡たずねある記 その(二)」『諫早史談』第19号 1987

II 調査の経過

1. 調査の概要

長崎県遺跡地図「長崎90 諫早南部」の30、31で記載されているのが周知の遺跡である小栗・林ノ辻遺跡である。

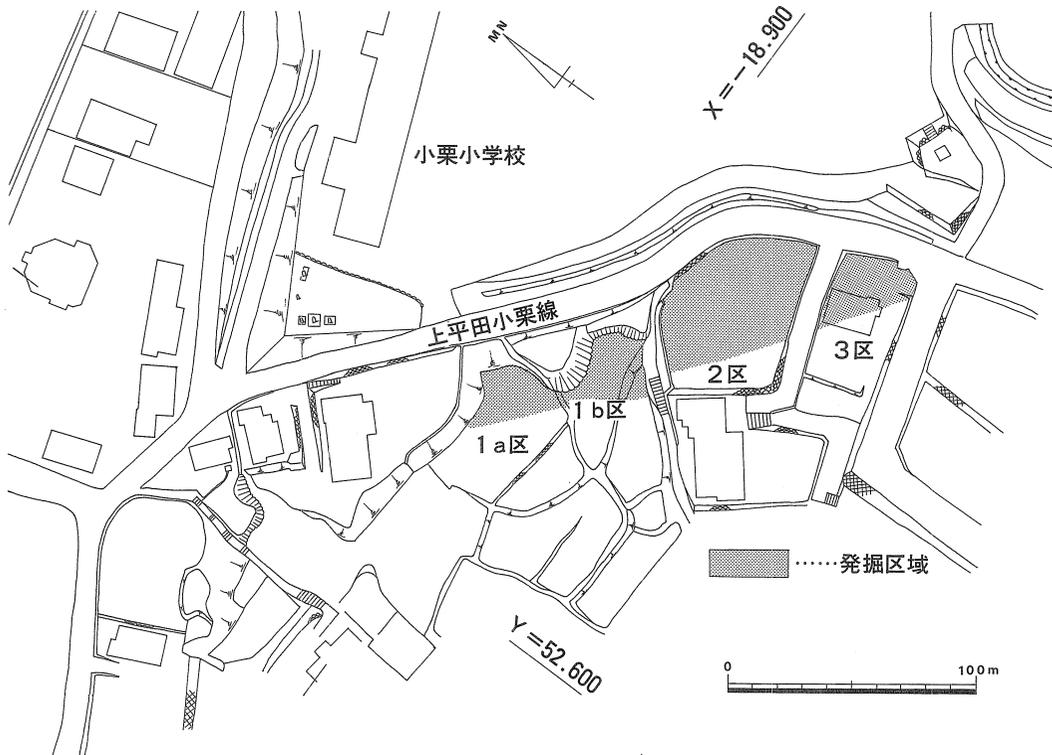
この遺跡の北縁を通過する道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘の通知が提出され、種々協議の結果、記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなったのである。

この小栗遺跡の北縁を通行する上平田小栗線の道路改良事業に伴う発掘調査は、事業認可の決定を経て実施する事とした。

調査は、全面発掘を前提として、一部トレンチ調査も併用して実施した。

また、遺物取り上げについては、全てドット・マップに記入し、海拔高を求めて記録することとした。

このことにより調査は、平成3年5月21日より実施し、途中雨に悩まされつつも同年7月11日に終了した。



第3図 発掘区域図 (S-1/1,500)

調査関係者は、次のとおりである。

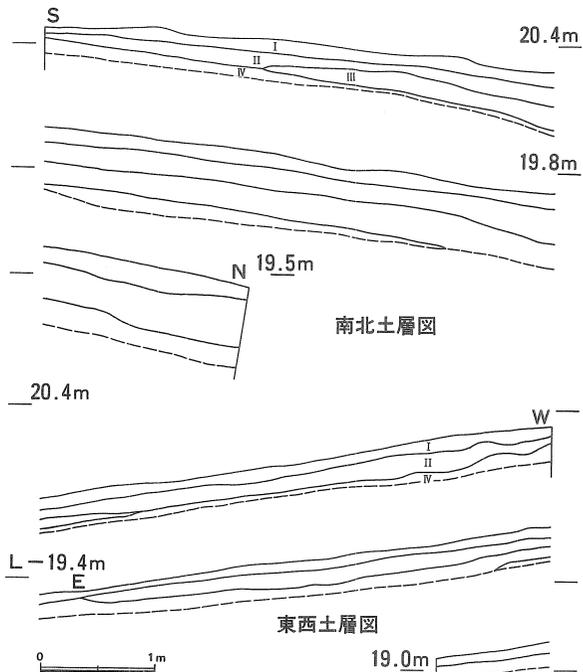
〔土木部関係〕	〔教育委員会関係〕
伊藤 秀敏 (土木部長)	山口 利男 (教育長)
青木 靖博 (道路課長)	吉原 照子 (文化課長)
喜多 徳之 (〃 補佐)	浦川 謙司 (〃 補佐)
久保 百樹 (〃 技術職員)	秀島 貞康 (〃 事務職員 調査担当)
早田 明生 (〃)	古賀 力 (〃 歴史資料調査員)
勝谷 重俊 (計画監理課主任)	
西山 恒子 (〃 事務職員)	

III 遺跡の概要

第3図に発掘区域図を掲載しているが、1a区のみで遺物の包含層が認められ、それ以外の区では、包含層が認められなかった。1a区の土層図を第4図に掲載したが、過去の調査事例と大きく異なる様相は示さない。南北土層実測図では、表土(I)の下には暗茶褐色砂質土(II)があり、後世の攪乱を受けており、近世陶磁器片を含む。更に下位は暗茶褐色粘質土(III)があり、この層は東西土層壁までは及んでおらず、このことは第8図の遺物分布と一致している。遺物包含層である。基盤層は褐色粘質土(IV)で、均質な層相を示し炭化物を含んでいる無遺物層である。

1. 遺構 (第5～9図)

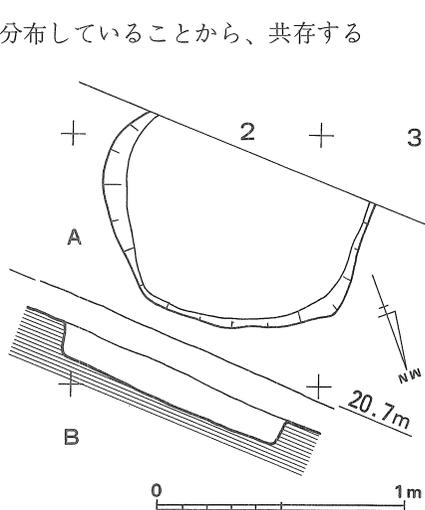
土壇1 (第5図) は、A2区において検出。略円形を示し、立ち上がりは垂直に近い。現存長110cm、高さ10cm。遺物の出土は無かった。土壇2 (第6図) は、L5で検出。柱穴状を呈し、長径110cm、短径83cmを計る。堀方は三段。遺物の



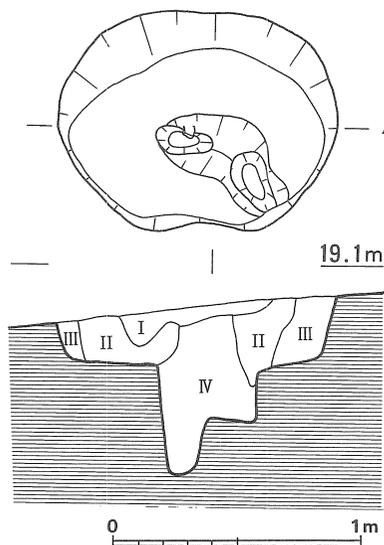
第4図 土層図 (S-1/60)

出土は無かった。土壙3（第7図）は、H2区で検出。完円形を示し、経約70cm、残存高10cm。覆土は茶褐色砂質土で遺物は出土しなかった。溝状遺構（第7図）は、G3～5区で検出。極浅で地山に含まれる安山岩の拳大の礫が入っている。覆土は地山の黄色土を含む茶褐色土で、遺物は含んでいない。炭化物を含む土壙（第9図）は、IJ6区で検出。長径190cm、短径145cm、深さ20cmほどの皿状の遺構である。覆土は、茶色粘質土で明茶色粘質土ブロックを含む層（I）、上・下層の漸移的な層（II）、1cm大の炭化物（木炭片）を含む灰茶色で粘性のある灰層（III）暗茶色粘質土（IV）である。集石土壙（第9図）は炭化物を含む土壙の直近（J8・9区）にある。土壙の法量は、120×120×30cm程の略方形を呈する。集石は、地山に含む安山岩を使用しており、一抱え大の大石は等高線の低い方に横位に据え、拳大のものは上位に使っている集石は、ほぼ土壙の範囲に分布していることから、共存する

ものと見なされ、また土壙埋設後配石されたと思われる。遺物は覆土中より10数片出土しているが、図示できるものがない。しかし、胎土・調整方法・焼成より見て中世を遡るものではない。



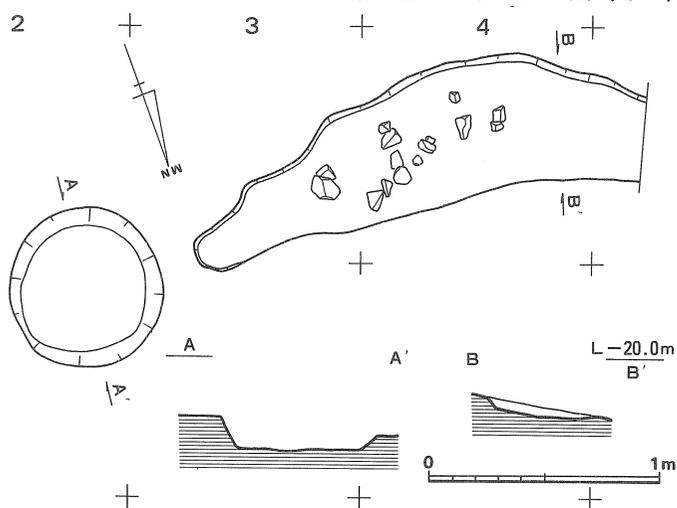
第5図 土壙1実測図(1/30)



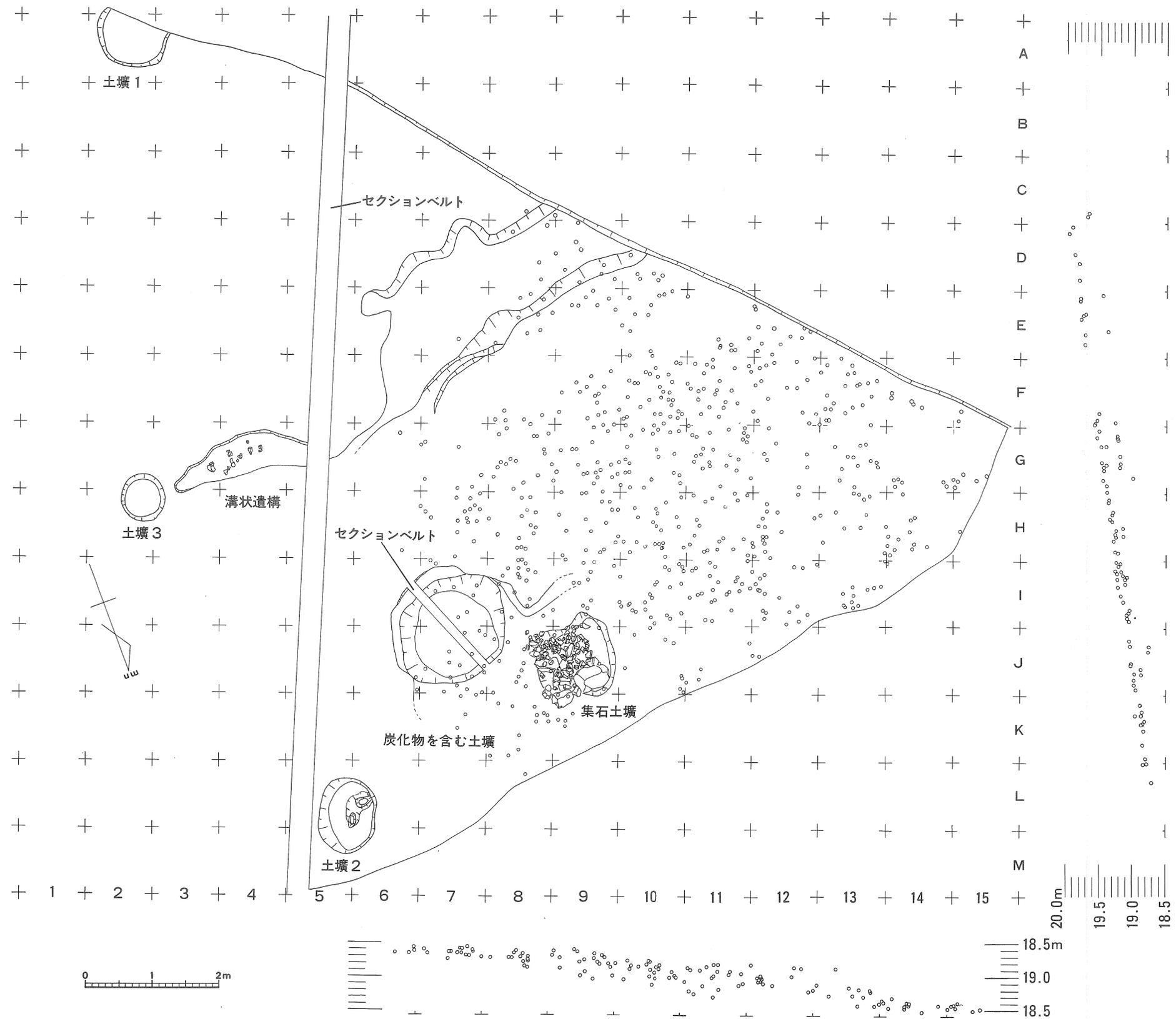
第6図 土壙2実測図(1/30)

2. 遺物(第10図) +
ドット・マップ G
によって取り上げた遺物は、土器734点、石器49点を数える。が、細片が多く8点を図示した。 H

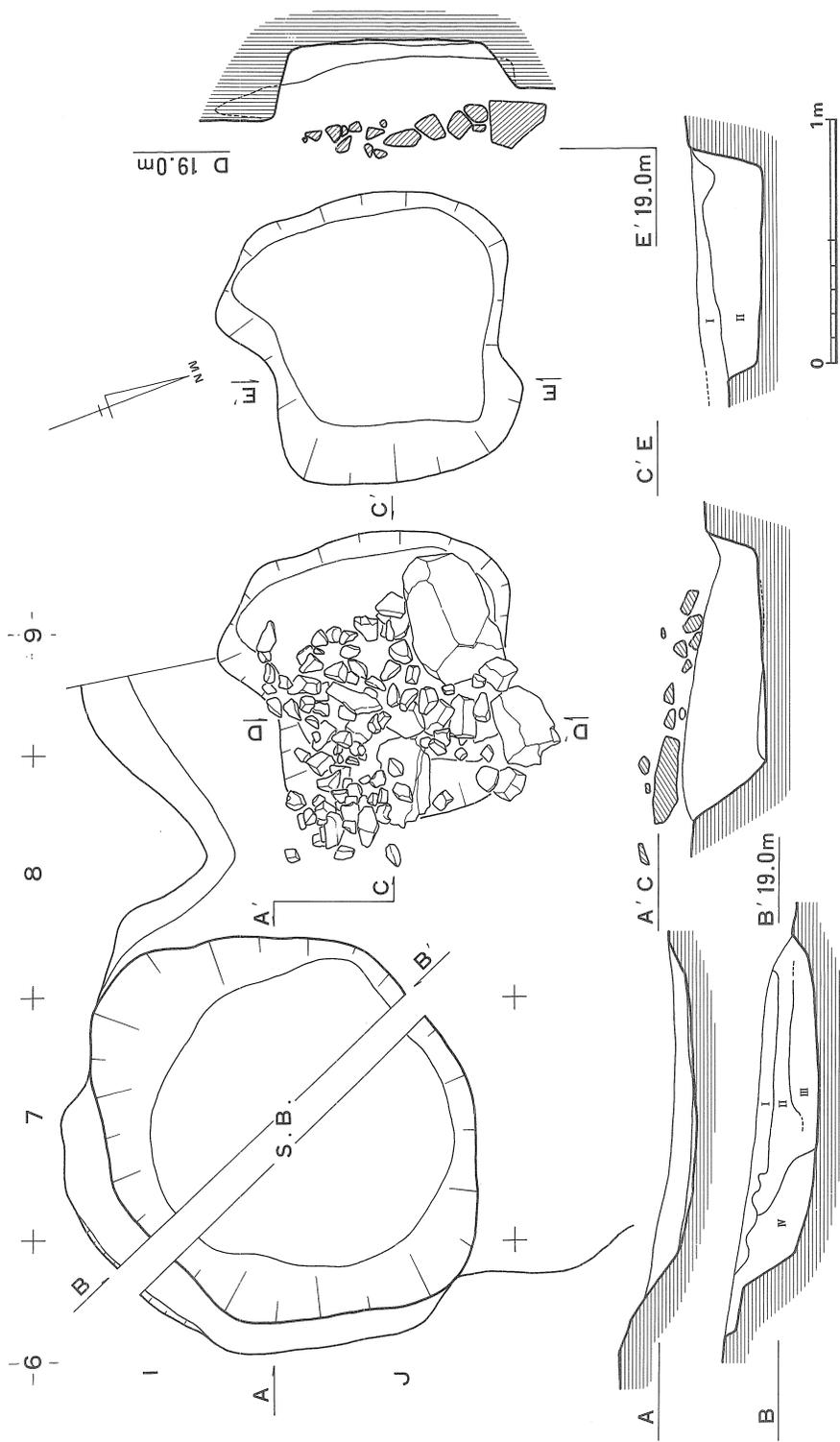
1～3は、土師質土器で、1は復元底径56mm残存高



第7図 土壙3と溝状遺構実測図(1/30)

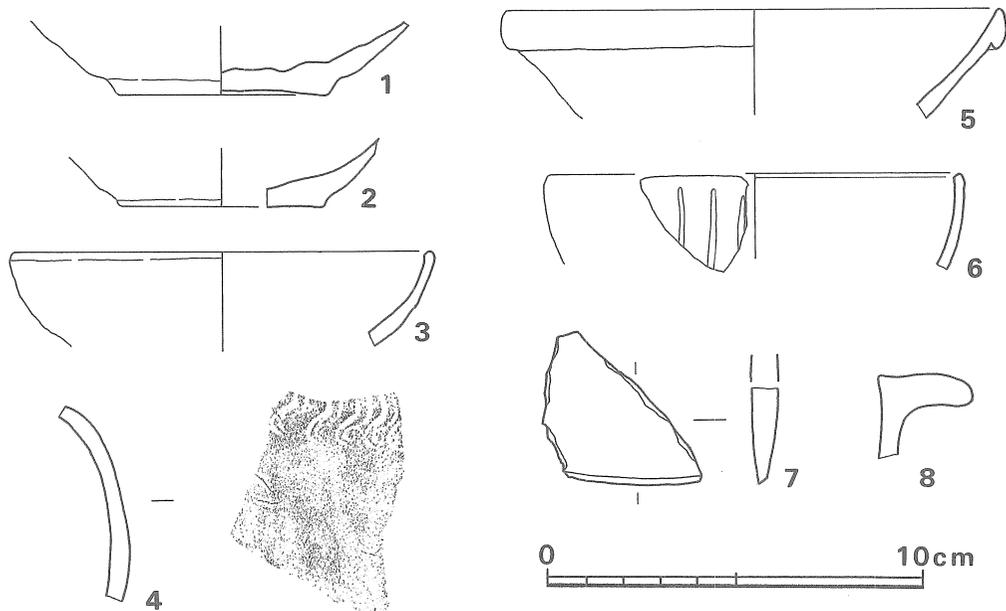


第8図 遺構配置図と遺物分布図 (1/60)



第9図 炭化物を含む土壌と集石土壇 (1/30)

19mmを計る。水挽きの跡が顕著に残る。色調は明褐色を呈し、胎土・焼成良好である。調整手法は器表が荒れており不明。2は復元底径54mm、残存高13mmを計る。調整手法不明。色調は黄灰色。胎土・焼成ともに良好。底部に板目を残している。3は復元口径112mm、残存高25mmを計る。口唇部が僅かに内弯する。色調は黄褐色、胎土・焼成良好である。調整手法は不明。4は壺の肩から胴部にかけての破片と思われる資料で、肩部に蕨手文を逆さまにしたようなスタンプを施文する。外面はタテのへらナデあるいはミガキ、内面ナデ調整。色調は外面茶黒色。内面灰茶色。胎土は精良であるが、0.5mm大の石英粒や微細な金雲母片を含む。焼成は良好である。5は玉縁口縁の白磁碗片で、推定復元口径130mm、残存高30mmを計る。6は緑色を呈する青磁碗片で、縦位にへら描きの沈線を引く推定復元口径110mm、残存高25mmを計る。胎土・焼成良好で、内・外面に細かな嵌入が入る。7は複輝石安山岩製の石包丁と推され、両面から研磨し、片刃を付けている。8は弥生土器の破片で、中期の所産である。



第10図 遺物実測図 (1/2)

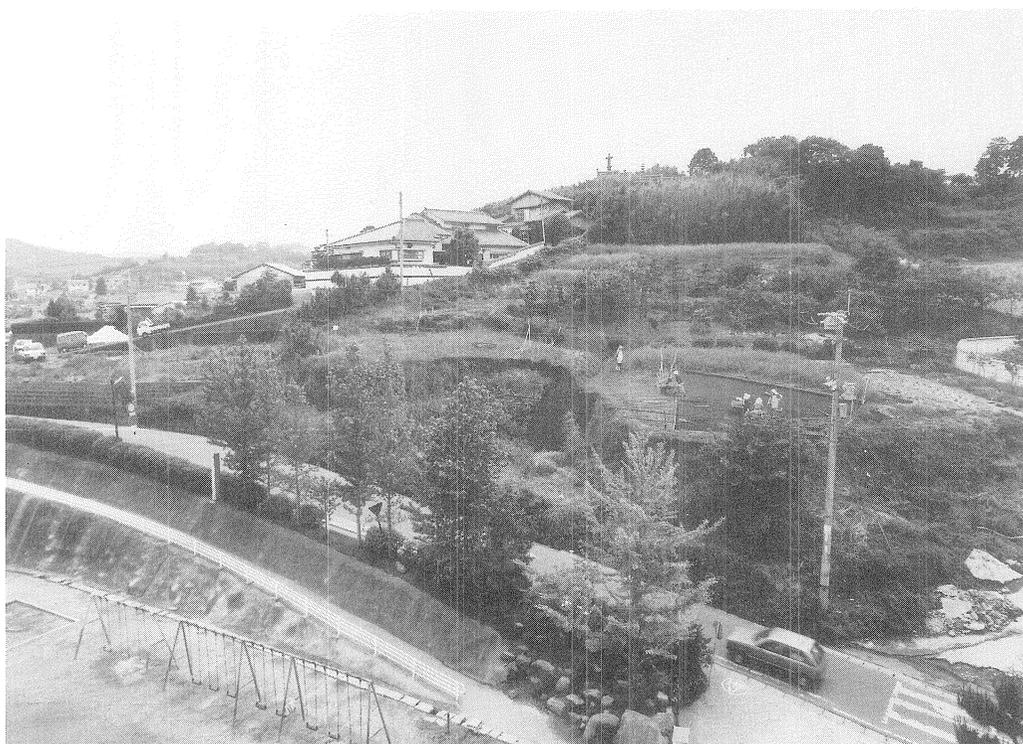
III まとめ

以上、調査の概略を記したが、第8図に示す通りD～F・6～9区の緩傾斜面より下位においてのみ、遺物の検出がなされた。このことが何を意味しているのか、周辺の調査により明らかになるものと思われる、将来の課題と位置づけたい。今次の調査では今まで確認が成されていない中世期以降の遺物等が確認され、より上位に遺構の存在を彷彿させる。

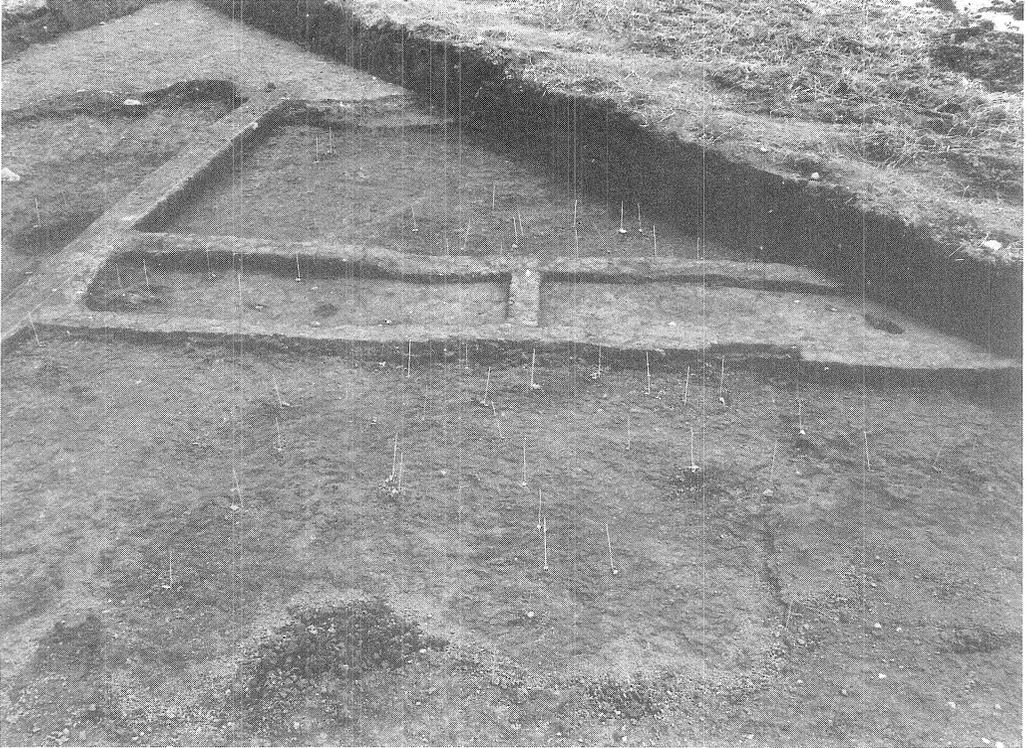
圖 版



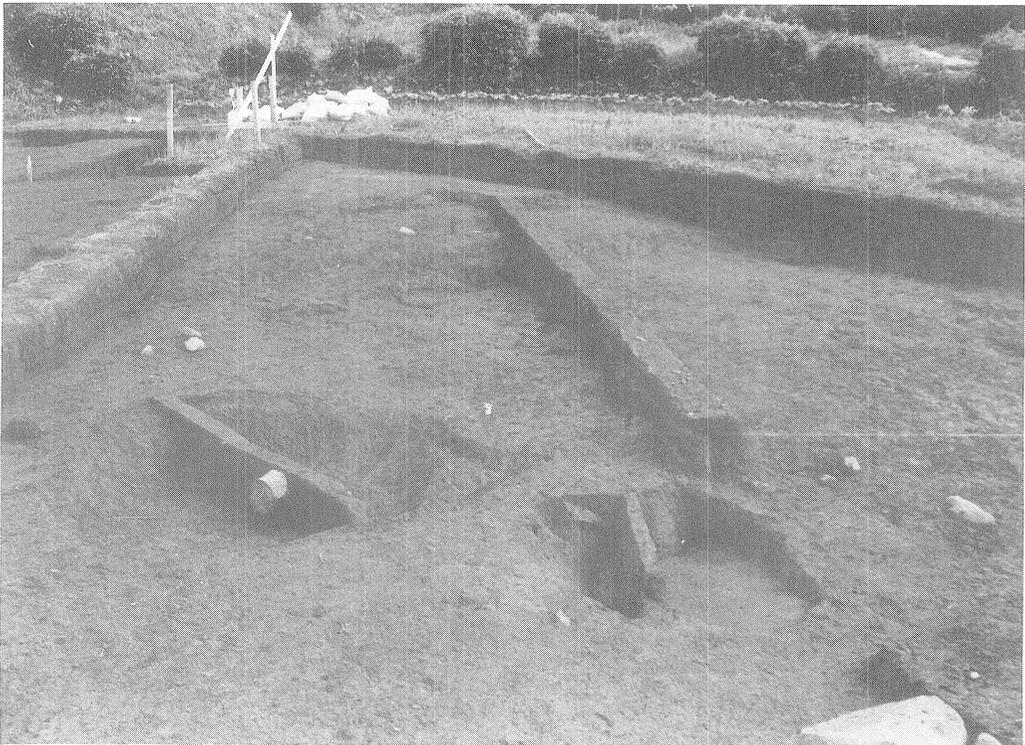
遺跡遠景



同上（調査風景）



遺物出土状況



炭化物を含む土壌と集石土壙

文化振興課

諫早市文化財調査報告書第12集

小栗遺跡 C 地点

— 上平田小栗線道路改良事業に伴う発掘調査報告 —

平成4年3月31日

発行所 諫早市教育委員会
諫早市東小路町1番地

印刷所 諫早印刷株式会社
諫早市福田町20-26

